26年間校長をされた

川端　幹雄　先生からの『ご助言』

四　授業評価のもつ意味

20年程前、私が教科指導のプログラム化という名前で問題提起した頃は、純粋に〝やれるだけのことはやっている、あとは教室の授業だ。〟という気持ちがありました。日常の言動からして十分な授業ができていない筈の教員も何人かいる。これらの教員にできるギリギリまでやってもらいたい。一般的に出来ている教員にはもう一歩、良い授業にしてもらいたいという願いがありました。

しかし、教科指導のプログラム化を提唱して、いろいろな試みをしてみるうちに様々なことがわかってきました。一つは教務のマネジメントのない学校では教室の授業は管理者側からみると完全なブラックボックスであるということ、毎日圧倒的な時間を投入している授業時間が実質的管理のない世界なのだということがわかってきました。

次に、教室の授業は管理が十分できないばかりでなく、個々の教員は自分の授業について教科の異なる管理職の注意や指導を受け入れないこと。一つの例で申し上げると、私が採用した国語科の教員で、どちらかというと漢文に強い教員がいました。私は彼の性格や態度から見て、彼は私学の教員より公立の教員になった方がよいと考え、公立の採用試験を受ける要領と、学校側の協力態勢を説明する際、彼の教室における授業の弱点にも触れてゆきました。彼は漢文に強い国語教諭という点で、中国哲学出身の私と同じ傾向があり、それは弱点についても同じ傾向があるわけで、同僚、先輩に聞いても、生徒の声を総合しても、やはり弱点ははっきりしていたのであります。これから授業をやりながら公立学校教員試験の対策ですから、弱点を確認しなければ対策も不十分なわけで、彼の弱点に触れてゆきました。その時彼は断固として私の意見を容れないのであります。同じ教科の、しかも校長が自分の進路も含めて考えてくれている状況の中で、自分の教室の授業については他の意見を全く受け容れようとしない。これが実情であります。客観的なデータに基づく数値の評価以外に教室の授業改善はないという実感を持ちました。

生徒募集や入学試験、そして教育課程、学校行事、生徒指導、進路指導はいずれも校長主導で改善を進めることができる。しかし一番大切で、一番時間を使っている教室の授業については校長は無関係、校長も管理職も介在できない、少なくとも具体的には手を出せない。これは変だということであります。

ヒューマンリンクからのご提案

近年、授業アンケートは時間と労力が大きいなどの理由から休止されることがあります。しかし、この川端幹雄先生の過去にいただいたご執筆を改めて拝読しますと、授業アンケートをやめると**教室の授業はブラックボックス化してしまう**のではないかと懸念いたします。やはり**授業アンケートを続けるのは、教務をマネジメントし特色ある学校づくりをするにおいては絶対的な機能に近い**ことになります。抵抗がありましても、有効な形でならば継続するものです。実際に継続されている学校はすごい成果をあげておられます。今回同封の各種冊子及び資料をご参考ください。